

# I アジアを駆ける馬

馬の祖先は今から約 5500 万年前に北アメリカで誕生し、世界各地へと生息域を広げた。馬と人が出会ったのは約 300 万年前。紀元前 3000 年頃には馬の家畜化が行われていたと言われている。その後、馬は人の文化の発展に密接に関わるようになった。ここでは、アジアの中でも、日本在来馬のルーツである中国の馬の利用に関する史料を紹介する。

中国における馬の家畜化を示す最も古い例は、殷墟（河南省安陽市、紀元前 14～11 世紀）で出土した車に繋がれた馬骨と馬具である。その後馬の利用は黄河中流域へ、そして大陸中へと展開し、馬の飼養管理体制も確立していった。

## 唐三彩馬俑 中国・唐代（7～10c）旧制学習院歴史地理標本室収蔵資料



中国・唐代（7～10 世紀）に制作された馬俑。本品はアラブ (Arab) 種の馬の特徴を持つ。唐ではシルクロードを通じて西方から入ってきた商品とともに多くの馬が取り込まれていた。

(国際研究教育機構 PD 共同研究員 橋本佐保)

## 太宰春台評小戎図 江戸（18c）松室家史料

「小戎」とは、中国古代に用いられた馬立の戦車のこと。この「小戎」の語は、もと儒教の経書の一つである『詩経』に見える。本資料には、この「小戎」の絵図とそれに対する評語があり、前者は釈暁山 (1706～1742、名は亮徹、本姓は高木)、後者はその師の太宰春台 (1680～1747) によるものである。これらは古典（とりわけ儒教の経書）に見える動植物や器物が何であるかを研究する、いわゆる名物学の成果といえる。

なおここに見える太宰春台の評語は、おそらくその文集などには見えない佚文である。朱熹 (朱子) の『詩経』注釈 (『詩集伝』) をはじめ、中国古代の様々な文献を駆使して、逐一暁山の誤りを指摘している。またその中段に「皇疏」(中国南北朝時代、梁の学者皇侃の『論語義疏』) が引かれていることは、注目に値する。これは、中国本土では早くに失われ、日本にのみ残存していた『論語』の注釈書である。太宰春台と同じく荻生徂徠の門弟であった根本遜志が、足利学校に遺存していた写

本を整理の上、出版して世に広く知られることとなった。ここで『論語義疏』が引かれているのは、当時としては最新の研究成果を反映している。

最後に本資料の来歴であるが、これはもと学習院中等学科の図画教師であった松室重剛 (1856～1929) の旧蔵である。松室自身が入手したものであるかは未詳であるが、松室家は、京都松尾大社に縁の深い月読神社の神職をつとめ、また朝廷の様々な御用をつとめる非蔵人の家柄であったことから、同家に伝来したものであった可能性もある。

(国際研究教育機構 PD 共同研究員 中嶋諒)



## 騎馬打毬の発祥と伝播

騎馬打毬はペルシアのダレイオス I 世 (在位紀元前 522～486 年) が編成した騎兵隊の武術訓練の手段として騎馬擬戦を始めたことに端を発すると言われている。これがシルクロードを通じて世界中へ広まり、その土地に合わせた変化を遂げた。インド北東部で行われていた打毬は 19 世紀まで続き、その後はアメリカ、イギリスなどでポロとして発展した。

中国における騎馬打毬は王侯貴族が行うスポーツとして唐代に最も流行した。ちょうどこの頃、唐で鎧の使用・重装騎兵の廃止・馬政の充実がなされた。軽装で俊敏な良馬を自在に操れるようになったことが、流行の要因であると考えられる。

日本の打毬は 8 世紀に渤海国から伝来し、天皇家や公家の間で行われた。騎馬打毬を実施した明確な記録が残されているのは天曆 9 年 (955) 以降である。しかしこの騎馬打毬は地方豪族の勃興により僅か 30 年足らずで衰退してしまった。

長い間歴史の中に埋もれていた騎馬打毬を復興したのが、江戸幕府八代将軍徳川吉宗 (1684～1751) である。彼は騎馬打毬を集団的実践的な武芸として各藩に奨励した。その後、騎馬打毬は幕末まで武家の間で盛んに行われるようになった。現在でも騎馬打毬が行われているのは宮内庁、山形県山形市豊烈神社、青森県八戸市長者山新羅神社である。両神社では神事として継承され、県の無形文化遺産となっている。

本展示では、霞会館のご協力により上記の打毬に関する映像資料の上映が実現した。あわせてご覧いただきたい。

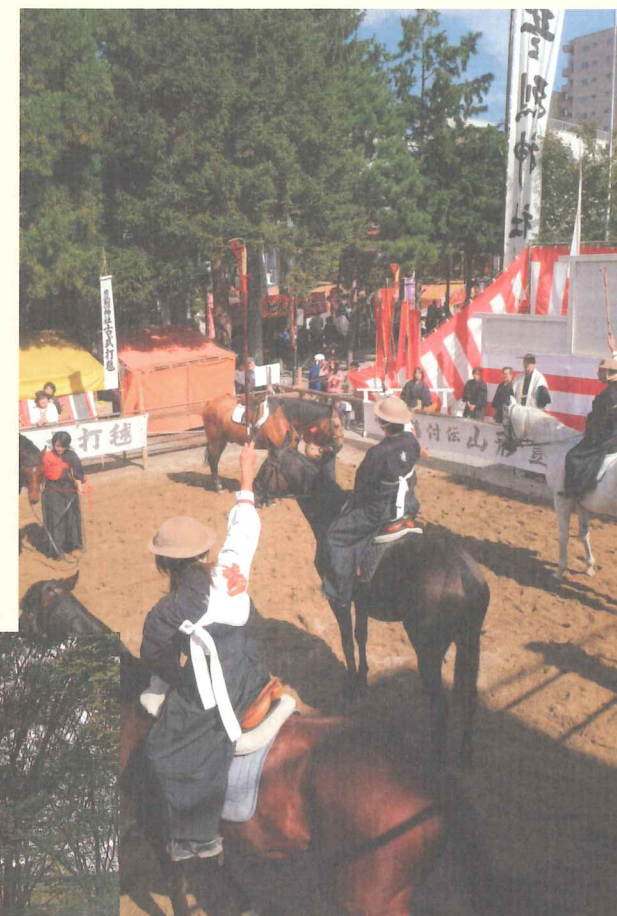
(国際研究教育機構 PD 共同研究員 橋本佐保)



八戸長者山新羅神社



宮内庁



山形豊烈神社

写真はいずれも霞会館編『騎馬打毬』より